2023/12/31 朝拝説教（年末礼拝）

「主のみこころならば」
ヤコブ　４章１１－１７節

鄭　ヒムチァン

前　　奏
賛　　美　　教会福音讃美歌 ４０
祈　　祷　　稲本 創　役員
主の祈り
説　　教　　ヤコブの手紙　４章１１－１７節　「主のみこころならば」

今朝は年末礼拝ということで私たちのすべての歩みが神様の主権のもとにあり、そしてこれからもそうであることをみことばから学びたいと思います。みことばを読む前に簡単に本日の箇所であるヤコブの手紙についてお伝えいたします。ヤコブの手紙を書いたのは、イエス様の12弟子であったヤコブではなく、イエス様の弟であり、エルサレム教会の指導者であったヤコブです。そしてこの手紙の対象はユダヤ人クリスチャンたちの教会であったと考えられます。ヤコブはユダヤ人教会の大きな課題を見抜き、この手紙を通して必要な多くの教えを語っています。今日はそのヤコブ書の中から「神の主権の下に生きる」ということをテーマにともに学んで参りましょう。

■聖書朗読　ヤコブの手紙　４章１１－１７節

11　兄弟たち、互いに悪口(あっこう)を言い合ってはいけません。自分の兄弟について悪口(あっこう)を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口(あっこう)を言い、律法をさばいているのです。もしあなたが律法をさばくなら、律法を行う者ではなく、さばく者です。
12　律法を定め、さばきを行う方はただひとりで、救うことも滅ぼすこともできる方です。隣人(となりびと)をさばくあなたは、いったい何者ですか。
13　「今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう」と言っている者たち、よく聞きなさい。
14　あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。
15　あなたがたはむしろ、「主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」と言うべきです。
16　ところが実際には、あなたがたは大言壮語して誇っています。そのような誇りはすべて悪いことです。
17　こういうわけで、なすべき良いことを知っていながら行わないなら、それはその人には罪です。

はじめに11,12節を見ますと教会内で起こっている悪口(あっこう)についての戒め、忠告が語られています。本日の「主の主権の下に生きる」というテーマと教会内での悪口(あっこう)の問題が何の関わりがあるのかと思われるかもしれませんが、後の箇所と一連のつながりをもって語られていますので、ともに見ていけたらと思います。

11節　兄弟たち、互いに悪口(あっこう)を言い合ってはいけません。自分の兄弟について悪口(あっこう)を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口(あっこう)を言い、律法をさばいているのです。もしあなたが律法をさばくなら、律法を行う者ではなく、さばく者です。

ここでは教会内で互いに悪口(あっこう)を言い合ってはいけないと忠告されています。この「悪口(あっこう)を言」うと訳されているのは「～に対抗して言う」という意味の言葉で、誰かを貶めようとする動機をもって語る言葉を意味していると考えられます。教会の集まりの中で悪意をもって誰かを非難したり、評判を落とすようなことを語るようなことと言えるでしょう。ですからヤコブはここで互いに注意しあうということを禁じているのではありません。

悪口(あっこう)は誰かを貶めようとする言葉を語りますから、その悪口(あっこう)が持つ力が発揮されれば人の群れにおいて争いと分裂をもたらします。それ故に悪口(あっこう)が教会にもたらす影響は大きいものであり、教会を内部から壊していく力を持っているが故に危険と言えます。しかし、11節のみことばが私たちに教えようとしているポイントはそこではないようです。11節の続く箇所を見てみましょう。「**自分の兄弟について悪口(あっこう)を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口(あっこう)を言い、律法をさばいているのです。もしあなたが律法をさばくなら、律法を行う者ではなく、さばく者です。**」

このみことばにおいて焦点が当てられているのは、悪口(あっこう)による悪影響ではなく、その悪口(あっこう)を言っている本人がどのような状態にあるのかということであります。11節で「自分の兄弟について悪口(あっこう)を言ったり、さばいたり**する者は**、律法について悪口(あっこう)を言い、律法をさばいているのだ」とあるように、ここでは「する者」に焦点があてられています。このことが何を伝えようとしているか考えて見ましょう。

律法、すなわち神様が人に守るようにと与えられた掟において悪口(あっこう)は禁じられています。スクリーンをご覧いただければと思いますが、レビ記19：16をみますと神様は「**あなたは、民の中で人を中傷して回り、隣人(となりびと)のいのちを危険にさらすことがあってはならない。わたしは主である。**」と命じられています。

つまりヤコブは悪口(あっこう)を言わないようにと忠告していますが、それは神様が律法を通してそのことを人に命じられたからであります。すなわち悪口(あっこう)を言ってはならいと仰せられたのは神なのです。しかし、それを知っている教会という群れの中で悪口(あっこう)が飛び交うということは一体どういう状態に陥っているのか、ということについてヤコブはここで教えたいのです。

端的に申しますと、この悪口(あっこう)を言う人というのは神様が与えられた掟よりも自分の決定の方が上だと思っているということなのです。神様の掟よりも自分が正しいと思っている故の行為だというのです。律法は神様が人間にお語りくださった生き方の指針であり、神からの人に対する命令、願いであります。つまり律法はその律法を与えられた神様に従うことを求めます。しかし、悪口(あっこう)を言う人の中で何が

起きているのかというと、神の掟を拒否し、神の基準ではなく自分の基準、決断を採択して、他者への悪口(あっこう)を正当化してしまうのです。そこには律法の制定者である神様よりも自分が正しいという高ぶりがあり、自分がさばき主になっているという実態があるのです。ですからこの悪口(あっこう)の問題というのは実はその心の中身を見てみますと、神様よりも自分が上に立っているという高ぶりの実態、問題があるのです。

悪口(あっこう)を言う背景には兄弟姉妹よりも自分は偉いという優越心があるということも考えられるでしょう。しかし本質的には律法で仰せられている神様の命令を無視しているというところに、恐ろしい姿があるのだということです。それは自分が神よりも偉いという究極の高ぶりがある。みことばはそのことを私たちに気づかせ、教えているのです。

12　律法を定め、さばきを行う方はただひとりで、救うことも滅ぼすこともできる方です。隣人(となりびと)をさばくあなたは、いったい何者ですか。

律法の制定者であり、その律法によってさばくことがおできになる方は唯一神様お一人であるのだと語ります。神様は全能者であり、救うことも滅ぼすこともできる方です。ヤコブは「隣人(となりびと)をさばくあなたは、いったい何者ですか。」と語ります。本来さばかれる立場の人間が、神様のさばきの高き座について、兄弟のあれこれを批判し、悪口(あっこう)を語り、さばいている。あなたはいったい何者なのか。神様の御前にあって自分が何者であるのかを知っていますか。と聞いているのです。このみことばを自分事として受け止めるならば、さばかれる方は唯一神お一人であり、実は誰かをさばいていた自分こそがさばかれる者であったのだという気付きがあるのではないでしょうか。神様は救うことも滅ぼすこともできるのです。その神様の御前に私たち人間は一人ひとり置かれているのです。

私たち一人ひとりが神の御前にいるということを今一度よく考えたいと思います。先週はクリスマスを過ごし、私たちはインマヌエルである救い主イエス様の誕生を覚え、感謝しました。インマヌエル、それは「神が私たちとともにおられる」ということです。 律法を定め、さばきを行う、救うことも滅ぼすこともできる全能の神が私たちとともにおられるのです。これは驚くばかりのめぐみとしか言いようがありません。驚くばかりのめぐみはいつまでも驚くばかりのめぐみなのです。決してこのめぐみは理解して、納得できるようなものではありません。しかし、あっと驚くのは私たちの慣れであります。なんとこの驚くばかりのめぐみを当たり前にしてしまうのです。そしてその慣れは神様の御前であらゆる失礼、無礼を平気で行い、神様を恐れず、神様を軽く見る。神様がともにいてくださることを無視するようにもなります。今ここにいてくださる神様をいないものとして平気で生きてしまうのです。私たちは神様が今の私の考えていること、行っていることを知っておられ、見ておられると私たち自身の生活の中で意識することはどれほどあるでしょうか。神様は私たちの主、主人であられるでしょうか。それとも私たちが主人となっているでしょうか。高ぶりの姿か、へりくだった姿か。私たちはどちら一方の姿なのです。

13　「今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう」と言っている者たち、よく聞きなさい。14　あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。

　ここでは一人の商人のことが語られています。商売のために綿密な計画を立て、どこに行けば儲けが多く出るか、何をどんな人に売ればよいか、どれくらい期間商売をすればよいか、どこに店を立てればいいか。多くの計画を練り、立てたことでしょう。しかし、ヤコブは決定的なことを伝えます。自分の人生の運命を握っているのはあなた自身だと思っているのか。あなたは自分が明日も当たり前に生きていると思っているのか。ここでヤコブが指摘しているのは人の過信という高ぶりであります。やれば何だってできる。そういう力が私にはある。私はできるという思いで、神様なしに自分で決めて追い求め、そして必ずやこの計画は成し遂げられると疑ってやまない人の過信を見て、その心のあり様の変化を求めています。

ヤコブは「今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう」と言っている者たちに、あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたのいのちとは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧であると語っています。私たちはそもそものことを忘れてはなりません。私たちは創造者ではないということです。私たちは皆創造主である神に造られた被造物なのです。造られたものです。この世界に誰も生きられる人はいません。皆生かされているのです。しかし、人は与えられた命、能力、環境がゆるされていて、与えられているものだということを忘れて、あたかも自分が得たものであると錯覚し、それであらゆる事ができるというように勘違いして、過信してしまうのです。

　そのことが「あなたがたには、明日のことは分かりません。」という語りかけにもよく現れているように思えます。明日のことはだれもわからないということは誰も否定できない事実でありでしょう。しかし人はそれを分かっていると言うものの、実際の生き方を見るとそこにはまるで明日を知っているかのような過信的な生き方があるというのです。ゆえにヤコブは「あなたがたには、明日のことは分かりません。」と自明と思われることを真剣に語るわけです。

　創世記にでてくるバベルの塔の出来事はこのことをよく表しています。彼らは石ではなくレンガをつかい、漆喰ではなく瀝青、アスファルトのようなものを使ったと聖書に記されています。こういうことができる知識と技術力を有していました。ここには高度な文明・技術があったことがわかります。創世記11章4節にはこのように書かれています。

創世記11：4
「彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」

　バベルの塔が建てられたるあたりその動機がここに記されています。「われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、そして名をあげよう。そして地の全面に散らされることがないように。」ということです。高度な技術と知識は過信をうみ、名をあげるという高ぶりの塔を築きあげたのです。塔を建て、町を築いた者たちが持っていた目的の一つは散らされることがないようにというこ

とでした。しかし、神様は彼らをどうされたでしょうか。言葉を乱し、彼らは結果的に散らされたのであります。神の御手にあっては人の命、営みというのは一瞬にして消えてしまう霧なのです。人間がいかに小さき存在であるか、対して神の偉大さとはいかに計り知れないものであるのか、そこに目を留めるように促しているのです。

実際のところ、神様は人の生涯の中であらゆる導きを通して、私たち人に人間という存在の小ささ、弱く脆い土の器であるということを気づかせてくださるのだと思います。しかし残念なことに脆く儚いありのままの人間の姿を知った時、人は偉大な神の御前にひれ伏すのかと言うと、そうではない姿が現実の中で見られることが多々あります。例えば「一度限りの短い人生なのだから、好きなことを好きなようにして生きよう」という自己充足に走る人がいるでしょう。反対に「どうせ人はみな死ぬのだから何をしたって無意味なのだ」という諦めと無気力という現れもあるでしょう。

しかし神のことばである聖書はそのどちらともを退け、このように勧めます。
15　**あなたがたはむしろ、「主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」と言うべきです。**

ここには忠告があります。自分だけで立てた計画でこのように生きようと言っている人にむしろこう言うべきですとはっきり伝えます。“主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」と言うべきです。”と。もちろんこれをそのまま声に出して言えば良いというような表面的なことではありません。これは心の変革を迫ることばです。自分の人生は自分で支配できると思う生き方、高ぶりを退け、主の主権の下に生きるしもべとなれという要請です。私たちの人生の操縦席・ハンドルを神に明け渡し、主が連れて行ってくださるところに従って行きなさいということでしょう。

しかし、このことばには同時に、神様が憐れみと主権をもって人を導いてくださるのだということも見えて来ます。つまり「主のみこころであれば私たちは生きることがゆるされ、このこと、あのことをすることが与えられる」ということです。神に生かされ、与えられ、導かれるという神とともに生きる幸いな生き方に招かれているのです。

人には限りある生という限界があります。しかし神様はみこころをもって人を生かし、このこと、あのことをすることをゆるしておられるのです。そこに私たちは生きる意味を見出すことができるのではないでしょうか。更に私たちにこのことばから「主のゆるしの中ですべてのことが与えられている」ということをも知るのです。主のみこころであるがゆえに今生きており、今年１年生かされてきたのであり、主のゆるしの中で何かをするという日毎の業が与えられているということです。つまり私たちの人生というのは神の御前にあって生きることのできる権利ではなく、日々与えられている憐れみ、めぐみなのです。

しかし残念なことに１６，１７節ではこのように語られています。

16　ところが実際には、あなたがたは大言壮語して誇っています。そのような誇りはすべて悪いことです。　17 こういうわけで、なすべき良いことを知っていながら行わないなら、それはその人には罪です。

ところが教会の中には実際にはそうではない姿があったということです。あなたがたは大言壮語して誇っています。教会の中で人間の過信が満ちており、同時に自分の業を褒め称え、誇りにしている姿があったのです。神の主権の下に生きるしもべの姿はなく、むしろ自分がやった自分の素晴らしさそういったものに陶酔している人たちがいたのです。

17節でヤコブは「こういうわけで、なすべき良いことを知っていながら行わないなら、それはその人には罪です。」と言っています。教会はなすべき善い行いを知っていたでしょう。みことばを通して聞いてきたでしょう。何度も何度も繰り返し耳にしたことでしょう。しかし知っていながら行わない教会の姿があり、知っていながら無視してしまう姿があったのです。

神様はみことばを通して私たちにご自身のみこころをお示しになっておられます。神様ご自身が私たちに願っておられること、神様がお喜びになることを聖書のみことばを通してお語りくださっています。そして、同時にそのみことばを聞く私たちが神様の語りかけにどのように反応するのかを神様は常に見ておられます。私たちにできることはわずかなことです。それはそのみことばを素直に聞くということです。みことばを素直に受け入れる時深く教えられることがあります。時には責めを覚え、心がちくちくすることがあります。自分の過ちや間違った態度を示され、方向転換を迫られる時があります。神様がみことばを通して私たちに示されることに素直に応答していく時、私たちは変化していくと思います。

対して、もし私たちの心の内に「みことばが言っていることはもう分かっている。」とか、「今はみことばを読むのはいい。」というような反応があるのなら、そこにはもしかすると神様よりも自分が高い位置にいるという高ぶりがあるのかもしれません。本日読んだみことばはそのようなところから立ち返るようにと語りかけています。

同時に私たちの実存というのを見ますと、私たちは神様のおしえを知っていながらも、良心の咎めがありながらも、しかし自分自身を優先してしまいます。神様の言われた通りに生きたいという願いがあり、みことばを受け入れるのだけれど、長くは根づかなかったり、何か妨げるものによって消えてしまったりしてしまいます。今日のみことばから学んだことを当てはめるのなら、そこには自分が主人であると思うのか、それとも自分は創造主によって造られた被造物に過ぎないという認識があるのか。主従関係のせめぎ合いがあると考えられます。神様に対抗している自分に出会ったことがあるでしょうか。そのような自分に嫌悪感を抱くでしょうか。変わりたいと願っているでしょうか。

神様は憐れみ深く、情け深いお方でありますから、私たちの生涯に介入してくださり、あらゆることを通して私たちを導いてくださいます。神様がいかに偉大な方であり、対して人がいかに小さく脆く、そして罪深い存在であるかを気づかせてくださるのです。時にはもうどうすることもできない自分の罪深さに気づき、絶望することがあります。しかし、そのような時にこそ私たちは自分でも知らない内に

へりくだっているということがあるのではないかと思うのです。ですから、あらゆることを通して私たちを導かれる神様に素直に応答したいと願います。私たちの人生のハンドルは神のものであると。

神様は約束してくださっています。ヤコブ4章10節を見てみましょう。
4:10　主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます
私たちの力で高く上がるのではなく、主の御前でへりくだり、しもべとして生きる時、私たちは高く上げられるのです。

　私たちは今年一年も生かされて来ました。神様のゆるしの中で今日という一日の人生、一年という歩みが与えられたのです。主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしたいと願います。主の御前にへりくだるということは非常に難しいことでありますけれども、本日のみことばは私たちの心の中からの変革を要請しています。そして心の中の変革は私たちの生き方そのものの変革となります。来る新しい一年私たち土浦めぐみ教会が主の喜ばれる群れとして歩むことができますように、そう願います。

祈　　り

賛　　美　　讃美歌４９４番
献児式(第三のみ)
紹介と報告
頌　　栄　　2023年 テーマソング
祝　　祷
後　　奏